

# ランダム・ウォークとくりこみ群

## 正誤表

行数のマイナス記号は下から数えた行数の意味です．

・ 頁	行	誤	正	・
・ 3	16	折れ曲がりうるのが	折れ曲がりうるが	・
・ 4	7	大きなスケール	種々のスケール	・
・ 5	15	実現である	数学的実現である	・
・ 27	8	左辺で	(1.18) で $M \rightarrow \infty$ とした式の左辺で，	・
・ 49	-10	実数の集合	実数の集合 $\mathbb{R}$ や無限長 path の集合 $\Omega$	・
・ 94	-3	$d-4$ 【 $k$ の指数の min の中】	$n-4$	・
・ 137	-11	によって定まる．	によって定まる．また，同じ $C$ を用いて $\sup_{n \geq 1} \int_{\mathbb{R}_+} e^{C\xi} \tilde{P}_n[d\xi] < \infty$ も成り立つ．	・
・ 149	1	マルコフ性に類似の性質がある．	マルコフ性（独立増分性）がある．	・
・ 149	5	重複対数の法則...書いておく．	【トル】	・
・ 149	7	【151 頁 -5 行まで，命題 5.15，注，証明】	【全面入替（別項）】	・
・ 150	2	【行末ピリオド】	【トル】	・
・ 150	3	$b_n(\tilde{w}_1)$	$b_n(\tilde{w})$	・
・ 150	4	【行末ピリオド】	【トル】	・
・ 155	12	【157 頁 7 行まで，下からの評価の証明】	【全面入替（別項）】	・
・ 197	-6	$s^\nu$ 【数式の右辺】	$s\nu$	・
・ 199	図 6.15	$\gamma$ 【キャプション中，2 カ所とも】	$\nu$	・
・ 245	6	最小値をとる	最小値をとる．	・
・ 277	-8	得る．	得る． $G_n$ についても一様に同様の評価がある ので $\sup_{n \geq 1} \int_{\mathbb{R}} e^{C\xi} \tilde{P}_n[d\xi] < \infty$ も成り立つ．	・
・ 282	-4	【「定理 5.11 の証明を行う」の直後】	【§ C の概要を追加挿入（別項）】	・
・ 286	-4	【和の記号下部条件式 2 行目冒頭の縦棒線】	【トル】	・
・ 321	19	非可算無限集合では	非可算無限集合では (F.1) で議論したように	・
・ 321	19	役に立たない ( (F.1) 参照 ) ．	役に立たない．	・
・ 325	16	$C \in \Omega$	$C \subset \Omega$	・
・ 332	12	【「他方」から 333 頁 -1 行まで】	【意味ある記述で正しいが，155–157 頁入替後は不要】	・
・ 334	5	§ 5.4.2 では...紹介する．	【トル】	・
・ 334	-9	【「定理 F.10 は」から 335 頁 -4 行まで】	【正しい定理だが，155–157 頁入替後は不要】	・
・ 335	8	$P[A_{k+1}]^c$ 【等号の右辺の和の中の分母】	$P[A_{k+1}^c]$	・
・ 338	4	$t$ 【右辺被積分関数分母】	$\xi$	・
・ 341	2	【冒頭】	【更新情報用 URL の追加（別項）】	・
・ 346	12	preprint (2003) 【文献 [22] の出典更新】	Journal of Mathematical Science University of Tokyo <b>12</b> (2005) 417–443	・
・ 347	-8	, to appear 【文献 [37] の出典更新】	<b>32</b> (2004) 989–995	・
・ 347	-5	【文献 [39] の出典更新】	【(別項)】	・
・ 347	-2	【文献 [40] の出典更新】	Probability Surveys <b>2</b> (2005) 145–190	・
・ 347	最後	【最後】	【2004 年以降の論文の追記（別項）】	・

### 命題 5.15 とその証明 (149 頁 7 行から 151 頁 -5 行まで) の改訂版

命題 5.15 (5.55) の到達時刻  $T_n$  について,  $T_{n+1} - T_n, n = 0, 1, 2, \dots$ , は独立である (歩数はスケール方向に (定常様ではないが) ランダムウォークである). すなわち, 任意の自然数  $N$  と任意の非負整数列  $\ell_n, n = 0, 1, \dots, N-1$ , に対して

$$P[T_N - T_{N-1} \leq \ell_{N-1}, \dots, T_1 - T_0 \leq \ell_0] = \prod_{n=0}^{N-1} P[T_{n+1} - T_n \leq \ell_n].$$

◇

証明 系 5.13 と (5.18), および系 5.5 を順次用いると,  $m < n$  のとき  $T_m < T_{m+1} \leq T_n$  に注意して

$$\begin{aligned} P[T_{m+1} - T_m \leq c, T_{n+1} - T_n \leq d] &= \sum_{\substack{w \in \tilde{\Omega}_{n+1}; \\ T_{m+1,1}(w) - T_{m,1} \leq c, L(w) - T_{n,1} \leq d}} b_{n+1}(w) x_c^{L(w)-1} \\ &= \sum_{w' \in \tilde{\Omega}_1} b_1(w') x_c^{L(w')-1} \\ &\quad \times \sum_{\substack{\tilde{w}_1 \in \tilde{\Omega}_n; \\ T_{m+1,1}(\tilde{w}_1) - T_{m,1}(\tilde{w}_1) \leq c}} b_n(\tilde{w}_1) x_c^{L(\tilde{w}_1)-1} \sum_{\substack{\tilde{w}_2, \dots, \tilde{w}_{L(w')} \in \tilde{\Omega}_n; \\ L(\tilde{w}_2) + \dots + L(\tilde{w}_{L(w')}) \leq d}} \prod_{j=2}^{L(w')} b_n(\tilde{w}_j) x_c^{L(\tilde{w}_j)-1} \\ &= \sum_{\substack{\tilde{w} \in \tilde{\Omega}_n; \\ T_{m+1,1}(\tilde{w}) - T_{m,1}(\tilde{w}) \leq c}} b_n(\tilde{w}) x_c^{L(\tilde{w})-1} \\ &\quad \times \sum_{w' \in \tilde{\Omega}_1} b_1(w') x_c^{L(w')-1} \sum_{\substack{\tilde{w}_2, \dots, \tilde{w}_{L(w')} \in \tilde{\Omega}_n; \\ L(\tilde{w}_2) + \dots + L(\tilde{w}_{L(w')}) \leq d}} \prod_{j=2}^{L(w')} b_n(\tilde{w}_j) x_c^{L(\tilde{w}_j)-1} \\ &= P[T_{m+1} - T_m \leq c] P[T_{n+1} - T_n \leq d]. \end{aligned}$$

最後のほうの変形で,  $w' \in \tilde{\Omega}_1$  の歩数は 2 歩以上あるので, path の断片からくる因子は一つ以上存在すること, および, その因子は  $w' \in \tilde{\Omega}_1$  によらないことから, 因子を一つ  $w'$  に関する和の前にくくりだした. 3 個以上の変数の結合分布については以上の議論を繰り返せば 1 つの変数ごとの積に分解できることは明らかである. □

### 一般化された重複対数の下からの評価の証明 (155 頁 12 行から 157 頁 7 行まで) の改訂版

一般化された重複対数の法則の下からの評価を証明する. これまでのくりこみ群分析から次の 3 つが分かっている.

Scale 方向の独立増分性: 改訂後の命題 5.15 から,  $T_{n+1} - T_n, n = 0, 1, 2, \dots$ , は独立である.

長時間評価: 定理 5.9(i) から,  $D > 0$  と  $M > 0$  が存在して

$$(\forall n \geq 1)(\forall t \geq 0) \quad P[T_n \geq t] \leq M e^{-D \lambda^{-n} t}. \quad (1)$$

短時間評価: 定理 5.9(ii) と系 5.14 から,  $C, C' > 0$  が存在して, 任意の  $x > 0$  に対して,  $\alpha_n = x (\log n)^{-(1-\nu)/\nu}$ ,  $n = 2, 3, 4, \dots$ , とおくと

$$-C \leq \varliminf_{n \rightarrow \infty} \alpha_n^{\nu/(1-\nu)} \log P[T_n \leq \lambda^n \alpha_n] \leq \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \alpha_n^{\nu/(1-\nu)} \log P[T_n \leq \lambda^n \alpha_n] \leq -C'.$$

これから特に,  $C_0 > C$  なる任意の  $C_0$  を選んで固定すると,

$$(\forall x > 0) \exists n_0; (\forall n \geq n_0) \quad P[T_n \leq x \lambda^n (\log n)^{-(1-\nu)/\nu}] \geq n^{-C_0} x^{-\nu/(1-\nu)}. \quad (2)$$

一般化した重複対数の法則の下からの評価を言うには, 命題 5.18 から, (5.60) を証明すればよい.

以下  $t_n = 2C_0^{(1-\nu)/\nu} \lambda^n (\log n)^{-(1-\nu)/\nu}$  とおく. 命題 5.18 から,  $T_n \leq t_n$  が無限個の  $n$  に対して成り立てば ( $C_0 > C$  が任意であることから)  $c^{-\nu} = 2^{-\nu} C^{-(1-\nu)}$  で一般化した重複対数の法則の下からの評価を得る. これを言うために (通

常のランダムウォークの重複対数の法則の証明でも用いられるが)  $n$  の部分列  $m_n, n = 1, 2, \dots$ , をうまく選んで, その中で無限個の  $m_n$  について  $T_{m_n} \leq t_{m_n}$  を示す. 次のように選ぶ:

$$m_n = \left\lceil \frac{1}{\log \lambda} \left(1 + 2 \frac{1-\nu}{\nu}\right) (n+1) \log \log(n+1) + (\eta+1)n \right\rceil.$$

ここで  $[\cdot]$  はガウスの記号で  $\eta = \frac{1}{\log \lambda} \log \frac{2}{DC_0^{(1-\nu)/\nu}}$ .

補題 1  $\sum_{n=1}^{\infty} P[T_{m_{n-1}} > \frac{1}{2}t_{m_n}] < \infty$ . ◇

証明. (1) から機械的計算によって得る.

実際, (1) から

$$P[T_{m_{n-1}} > \frac{1}{2}t_{m_n}] \leq M e^{-D\lambda^{-m_{n-1}}t_{m_n}/2}, \quad n \in \mathbb{N},$$

だが,

$$D\lambda^{-m_{n-1}}t_{m_n}/2 = DC_0^{(1-\nu)/\nu} \lambda^{m_n - m_{n-1}} (\log m_n)^{-(1-\nu)/\nu}$$

において,

$$\begin{aligned} & m_n - m_{n-1} \\ & \geq \frac{1}{\log \lambda} \left(1 + 2 \frac{1-\nu}{\nu}\right) (n+1) \log \log(n+1) + (\eta+1)n \\ & \quad - \left( \frac{1}{\log \lambda} \left(1 + 2 \frac{1-\nu}{\nu}\right) n \log \log n + (\eta+1)(n-1) + 1 \right) \\ & \geq \frac{1}{\log \lambda} \left(1 + 2 \frac{1-\nu}{\nu}\right) \log \log n + \eta. \end{aligned}$$

よって

$$D\lambda^{-m_{n-1}}t_{m_n}/2 = DC_0^{(1-\nu)/\nu} \lambda^{m_n - m_{n-1}} (\log m_n)^{-(1-\nu)/\nu} \geq 2 \log n \left( \frac{(\log n)^2}{\log m_n} \right)^{(1-\nu)/\nu}$$

だが,  $m_n = O(n \log \log n)$  なので, 十分大きい  $n$  に対して,  $D\lambda^{-m_{n-1}}t_{m_n}/2 \geq 2 \log n$  となるから

$$P[T_{m_{n-1}} > \frac{1}{2}t_{m_n}] \leq M e^{-2 \log n} = \frac{M}{n^2}$$

なのでその和は収束する. □

補題 2  $\sum_{n=1}^{\infty} P[T_{m_n} - T_{m_{n-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_n}] = \infty$ . ◇

証明. (2) から機械的計算によって  $\sum_{n=1}^{\infty} P[T_{m_n} - T_{m_{n-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_n}] = \infty$  を得る.

実際 (2) で  $x = C_0^{(1-\nu)/\nu}$  とおくと,

$$\begin{aligned} \sum_{n=1}^{\infty} P[T_{m_n} - T_{m_{n-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_n}] & \geq \sum_{n=1}^{\infty} P[T_{m_n} \leq \frac{1}{2}t_{m_n}] \geq \sum_{n=n_0}^{\infty} m_n^{-1} \\ & \geq \frac{1}{\eta + 2 + \frac{1}{\log \lambda} \left(1 + 2 \frac{1-\nu}{\nu}\right)} \sum_{n'=n_0+1}^{\infty} \frac{1}{n' \log \log n'} \geq \sum_{n'=n_0+1}^{\infty} \frac{const.}{n' \log n'} = \infty. \end{aligned}$$

□

評価したい量は

$$\begin{aligned} P\left[ \bigcup_{\ell=k}^L \{T_{m_\ell} \leq t_{m_\ell}\} \right] & \geq P\left[ \bigcup_{\ell=k}^L \{T_{m_\ell} - T_{m_{\ell-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_\ell}, T_{m_{\ell-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_\ell}\} \right] \\ & = 1 - P\left[ \bigcap_{\ell=k}^L (\{T_{m_\ell} - T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\} \cup \{T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}) \right] \\ & \geq 1 - P\left[ \bigcap_{\ell=k}^L \{T_{m_\ell} - T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\} \right] - \sum_{\ell=k}^L P\left[ \{T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\} \right] \end{aligned}$$

であった．この右辺に  $T_{n+1} - T_n$  の独立性を用いると，

$$\begin{aligned} P\left[\bigcup_{\ell=k}^L \{T_{m_\ell} \leq t_{m_\ell}\}\right] &\geq 1 - \prod_{\ell=k}^L P\left[\{T_{m_\ell} - T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}\right] - \sum_{\ell=k}^{\infty} P\left[\{T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}\right] \\ &= 1 - \prod_{\ell=k}^L (1 - P\left[\{T_{m_\ell} - T_{m_{\ell-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}\right]) - \sum_{\ell=k}^{\infty} P\left[\{T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}\right] \\ &\geq 1 - \exp\left(-\sum_{\ell=k}^L P\left[\{T_{m_\ell} - T_{m_{\ell-1}} \leq \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}\right]\right) - \sum_{\ell=k}^{\infty} P\left[\{T_{m_{\ell-1}} > \frac{1}{2}t_{m_\ell}\}\right] \end{aligned}$$

を得るが，右辺第 2 項は補題 2 から  $L \rightarrow \infty$  のとき 0 に収束し，第 3 項は補題 1 から  $k \rightarrow \infty$  のとき 0 に収束するので，

$$P\left[\bigcap_{k=1}^{\infty} \bigcup_{\ell=k}^{\infty} \{T_{m_\ell} \leq t_{m_\ell}\}\right] = \lim_{k \rightarrow \infty} \lim_{L \rightarrow \infty} P\left[\bigcup_{\ell=k}^L \{T_{m_\ell} \leq t_{m_\ell}\}\right] = 1.$$

$C_0 > C$  は任意だったことを思い出すと，一般化された重複対数の法則の下からの評価

$$\overline{\lim}_{k \rightarrow \infty} \frac{|W_k|}{\psi(k)} \geq C^{\nu-1}, \text{ a.e.},$$

を得る．

## § C の概要 (282 頁 -4 行)

この節で定理 5.11 の証明を行う．証明は大きく二つの部分に分けられる．

第 1 段階 (補題 C.1, スケール  $n$  に関する整合性)． $m > n$  のとき， $2^n G_n \setminus \{0\}$  の点に初めて達するまでの通り方を指定した  $2^m \hat{\Omega}_m \cup 2^m \hat{\Omega}_m^r$  の path の集合の確率が  $m$  によらないことを言う．ここでの  $n$  と  $m$  の対応が decimation の粗い path と細かい構造を加えた path の対応ではなく， $2^m G_m$  まで届く path とその最初の数歩，初めて  $2^n G_n$  に届くまでの path，との対応である点で非自明かつ証明全体の中の本質をしめる．

第 2 段階 (定理 5.11 の証明, 歩数  $k$  に関する整合性)．最初の  $k$  歩を決めた path 集合の確率が  $k+1$  歩まで決めた path 集合の確率のしかるべき和に等しいことを言う．確率連鎖の構成とは  $k$  歩目の位置を表す確率変数  $W_k$  が全てについて同時に存在することの証明だから， $k$  に関する整合性が必要になる．この第 2 段階は標準的な拡張定理の整合性条件であって，第 1 段階があれば機械的にできる．

## 更新情報用 URL (341 頁 2 行)

本書に関する情報や訂正は web page で随時更新している．URL は  
<http://www.math.tohoku.ac.jp/~hattori/kyoritu.htm> .

## 文献 [39] (347 頁 -5 行から -3 行)

W. Werner, *Random planar curves and Schramm-Loewner evolutions*, in J. Picard (ed.), *Lectures on probability theory and statistics, Lectures from the 32nd Probability Summer School held in Saint-Flour, July 7-24, 2002*, Lecture Notes in Mathematics **1840** (2004) 107-195, Springer.

## 2004 年以降の論文 (347 頁最後)

- [41] T. Hattori, *The fixed point of a generalization of the renormalization group maps for self-avoiding paths on gaskets*, *Journal of Statistical Physics* **127** (2007) 609-627.  
 [42] M. Denker, K. Hattori, *Recurrence of self-repelling and self-attracting walks on the pre-Sierpiński gasket and  $\mathbb{Z}$* , preprint (2007).